

グローバルな視野を有し国際舞台で立派に活躍できる人材の育成をめざして

北脇信彦

システム情報工学研究科教授 国際総合学類長

はじめに

平成16年度末に学群・学類再編検討委員会から、「学群・学類再編の考え方と基本骨格」が示されました。これを受けて平成17年度に具体的な設計に取りかかる方針と聞いております。

このたび筑波フォーラム編集委員会から「現場から①学群・学類教育」の執筆依頼を受けましたが、国際総合学類は要検討学類の渦中にあるので、一旦はお断りしました。しかし、再度の依頼ですので国際総合学類の現状と課題について述べますが、本稿は、機関決定を経ていない、まったくの私見ということで、お許しをいただきたいと思えます。

グローバル化の時代への対応能力を備えた人材の育成

いわゆるグローバリゼーションの時代を迎え、政治、経済、文化、技術等のあらゆる

分野において、ますます国境を越えた連携・融合・競争が深まり、専門分野間の相互依存度が高まっています。

国際総合学類の前身である国際関係学類は、国際化の時代に十分に適応できる人材を育成するため、国立大学の中でこの種の学部としては最も早く1983年に新設されました。その後、国際を冠にいただく学部・学科が全国にたくさん設立されたことは周知のとおりです。

1995年には、国際関係学類が改組・再編されて、国際関係学主専攻と国際開発学主専攻から成る国際総合学類が発足しました。発足以来、国際総合学類は入学志願者状況や就職状況などから判断して、受験生や社会の要請に十分に答えており、筑波大学の看板学類・人気学類のひとつになっていると自負しております。

「学融合」による問題解決型の教育

カリキュラムは国際関係学主専攻における国際関係論・政治学・経済学・国際法・文化論、および国際開発学主専攻における社会開発・経済開発・開発工学などを柱とし、学融合的な内容にしてあります。これは、これまでの縦割りの一つの学問領域のみの教育では、複雑な国際社会の諸問題に適切に対応していくことが困難であると考えるからです。このような学問領域の中から二つ以上のディシプリンを選んで、それらを体系的に学べるようなカリキュラムを組んでいます。

本学類では卒業論文の提出を義務づけています。また、三年次には研究準備段階としての独立論文の制度があります。これらは、必ず現実の問題をテーマとして選択させ、学融合的なアプローチをとらせながらも、自分が選んだディシプリンのスキルを身につけられるように指導しています。三年次からは少人数で構成される国際学ゼミナールをとることができ、そのなかで実証分析的研究の進め方、体系的な論文の書き方などを学びます。

本学類の学生には、豊富なディシプリンの中から自分の専門とするものをはやく見つけ出し、積極的に自らの能力を高め、積極性・表現力・国際感覚豊かな若者に成長することを希望しています。

表現力豊かで積極性・社交性に富む国際人の養成

国際的に活躍するには語学が必要なことはいうまでもありません。実世界で役立つバイリンガルな人材を養成することも目標の一つです。真の国際人には語学力だけでなく、表現力豊かで社会性に富み外国人と自然に接することができること、自国の文化についても理解し外国人に説明できることが求められます。そのため本学類では、一方通行の講義だけでなく学生に積極的に質問させ、クラス全体で授業の内容についての討議をするように訓練するなど、学生に表現力と物事に積極的に対応する能力を身につけさせる教育を行っています。

本学類には外国人教員、外国人留学生、帰国生徒が多いことや、外国へ留学する学生がきわめて多いことが、外国人と自然にコミュニケーションができる習慣を身につけさせることに役立っています。

国際総合学類の課題

課題のひとつは、少ない教員で多くのディシプリンをカバーしていることです。大学院への進学を重視するなかで、より専門性を深めたいと考える学生に伝えるためには、ディシプリンが共通する他の学群・学類との垣根をより低くし、広い枠組みで専門的な勉学を可能にすることが必要です。

もうひとつの課題は、開発工学の扱いです。入学から就職・進学までという意味で、残念ながら現状では、開発工学分野は独り立ちできていません。開発工学分野における国際人を育成するためには、入学から就職・進学までを一貫して、工学分野・学際分野の教育・指導ができる仕組みを作らなければなりません。

国際交流については、これまでのように選ばれた交換留学生だけでなく、ごく普通の学生による身近な国際交流の促進も必要です。このために、「通信衛星を用いたeラーニングによるアジア大学間交流プログラム」を推進しています。また、逆に国際エリート育成も課題です。これには、「国連での国際インターンシッププログラム」や「世界銀行プログラムを利用した5年一貫制修士号取得プログラム」など、いくつかの施策を試みています。

国際総合学類と他の学類との連携と相互補完

国際総合学類では、授業科目の履修面での他の学類間の垣根を低くし、他の学類間の連携と相互補完を強める努力をしたいと考えています。

それと同時に、国際総合学類のアイデンティティをより明確にすることも必要です。通信衛星を用いたeラーニングによるアジア大学間交流などは、国際総合学類の

アイデンティティを高める方策の一環として取り組んでいます。情報・通信分野は、いまや単に技術者だけのものではなく、経済社会や日常生活に不可欠の存在になっており、産業技術的な視点と社会的・文化的な視点からの取り組みが必要です。

このたび提示された「学群・学類再編の考え方と基本骨格」のもとに、国際総合学類が抱える課題を解決するように努力したいと考えています。

(きたわき のぶひこ/メディア通信工学)